お茶の水女子大学
附属高等学校新聞部
文京区大塚2-1-1
03（5978）5856

目次

一面　スーパーグローバルハイスクール
二面　茶談会
三面　DISCOVERING JAPAN 小説
四面　夏の部活動報告 茶実子

世界で輝く女性へ

お茶の水女子大学附属高等学校は本年四月に文部科学省が推進するスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された。

SGHとは「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力の国際的素養を身につけ、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する」という目的のもと、文部科学省によって企画された事業だ。

二〇一三年度の校内調査によれば、在校生の約六五パーセントが「将来海外に留学したい」、もしくは「仕事で国際的に活躍したい」と考えている。

これまでも長年に渡って取り組んできた教育活動の成果として、本校は世界的に活躍をする卒業生達を数多く輩出してきた。宇宙飛行士の山崎直子さんも、そのひとりだ。

そんな中、今年からSGHに指定された事を受け、グローバル・リーダーとなり得る女性の育成を、さらに推し進めるための取り組みを始めた。

具体的にはエネルギーや環境、人口、ジェンダー、貧困と格差などのグローバルな社会的課題に対する興味と関心を高めながら、課題を発見・解決する探求的な学習を通して、異なる文化的背景を持つ人々と共に、国際社会の平和と持続可能な発展を担える人材を育てるための教育課程とサポート体制の準備である。

お茶高スーパーグローバルハイスクール構想

本校におけるグローバルな学習は一年次から二年次、三年次と発展していき、国際社会の平和と持続可能な発展に寄与する人材を育成することを目標としている。

本校では大学と併設されているという利点から、「お茶の水女子大学の全資源の日常的な活用」が可能である。多くのお茶高生が大学図書館やチューターを通して大学附属の高校であることを有効に利用し、学習の幅を広げている。

また、学外の組織との連携も行っている。その活動の一環として、去る八月ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）で、イオン1パーセントクラブが開催したインドネシア、日本、ベトナム三カ国の高校生と大学生六五人が環境問題について考える「アジア・ユースリーダーズ二〇一四」に、本校の生徒六名が参加した。

「アジア・ユースリーダーズ二〇一四」は「ハノイの大気汚染問題」についての講義、実験、視察、チームディスカッションを通じて考察し、日常生活で取り組める啓発キャンペーンを、高校生が提案するという企画だ。

高校生は各国混成で五チームを編成し、本校からは三年生の生徒がリーダーに、二年生の生徒の一人がサブリーダーとして活動した。

田植えや魚捕り、ライスケーキ作りの体験を通して、機械をあまり使わないベトナムの暮らしの大変さを感じるとともに、チームメイトや現地の方など多くの人と交流した。

別の日にはベトナムの現状を理解するために、環境において各方面から三つの講義が行われた。

一つめは、日本では環境省にあたる役所に勤務される方から、ハノイ市の大気汚染の原因や汚染状態の具体的な数値を、二つめはバス会社の方から、利用者を増やすためにどのようなサービス向上の工夫をしているかについて、三つめは、NGOの方から、今まで実施した大気汚染に関する市民キャンペーン例を教えていただいた。

参加者は質疑応答で積極的に質問をし、話し手と一体となりレクチャーを作り上げた。

また、実際に現地のバイクを使い、排気ガスの噴射口に白い紙を当て、どれだけ黒くなるかという実験をして、それをハノイ市内のバイク数に置き換えて考えることで、環境問題の深刻さを知った。

そして最終のプレゼンテーションまで、各チームがディスカッションと準備を重ねた。

その結果、二年生の鈴木晴媛さんと森川千晴さん（写真右）の所属するチームが優勝し、三年生の萬木春菜さんがリーダーを務め、藤原祥加さんが所属するチーム（写真上）が二位となった。

参加者たちは、プレゼンを通して環境問題への理解を深めただけでなく、教育の大切さを知り、プレゼンテーションにおけるアピールのコツを他国の生徒から学び、物事を多面的に見る力を身につける貴重な機会を得たという。

◆　◆　◆

今回本校がSGHに指定されたことについて、副校長の菊池美千世先生にお話を伺った。

Q. SGHに指定されたことで学校の何が変わりましたか。また、これから何か変わっていくことはありますか。

まだ計画の一年目なのではっきりとした変化はありませんが、先生方も生徒達もグローバルなことへの関心が高まってきており、情報を積極的に取り入れようとしたり、グローバルな活動をするための能力を伸ばそうとするなど、各々の意識の変化が感じられます。

Q. 本校のSGHの活動で一番重きを置いていることはなんですか。

もともと本校では社会に有意な女性の育成を目標に教養教育を行っておりますが、これからはよりグローバルに活躍できる未来の女性リーダーの育成に力を入れていきたいと思っています。

Q. 海外に行く機会が増えると思いますが、海外で活動することの利点はなんですか。

日本は世界の国の中でも均質性の高い社会なので、外国に行くことで世界が多様な人々によって成り立っていることを知ることが出来ます。

同世代の外国の生徒達の意識や能力の高さに気づくことで、改めて自分の進路を考える機会となってくれればいいと思います。

Q. 現在大学の留学義務化が騒がれていますが、留学を義務化することには賛成ですか。

先日のアンケートによると、本校の約七割の生徒が海外留学をしたいと考えている（表参照）ので、それが叶えられるのは良いと思います。しかし、現在は経済的な問題に加え、安全面の問題（治安の悪化や感染症など）によって意欲があっても留学できない人もいるという状況です。

行きたい人が行ける環境を作るのは素晴らしいことですが、義務化というのは無理があるのでは、と思います。

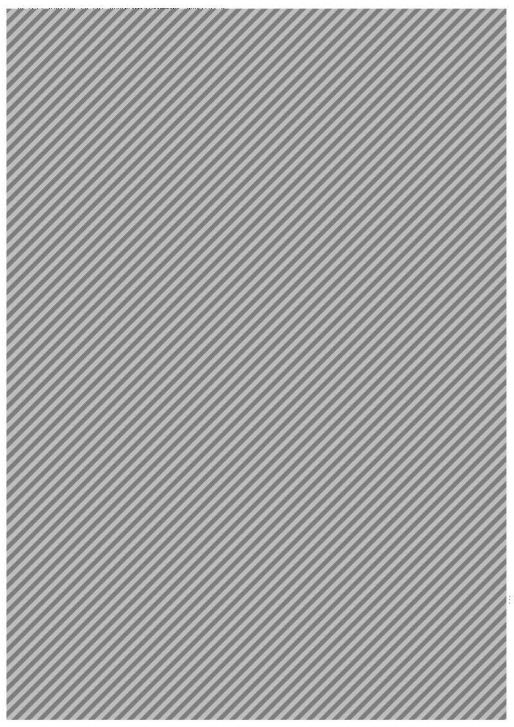
Q. SGHを通して本校の生徒にはどのような姿勢で、どのようなことを学んで欲しいですか。

本校の生徒は外国への関心が高いので、その部分を伸ばして行くと同時に、意欲や関心を裏打ちする知識・教養や、多様性を受け入れる寛容さを培っていってもらいたいです。また、自国文化もしっかり学んで欲しいと思います。

◆　◆　◆

SGHに指定されたことで、私達は海外に行く機会が多くなるだろう。外国文化への理解を深められることは大変喜ばしいことだ。

しかし、知識を持たずに意欲だけで行動したり、日本の文化への興味が希薄になってしまうことは避けなければならない。そのために、私達は常に様々な方面へ意識を向ける努力をし続けなければならないだろう。



「アジア・ユースリーダーズ 2014」
優勝チームのふたり

高校生の留学に関する意識調査　トビタテ！　留学JAPAN　アンケート

2014年9月1日実施

		学校合計	%
	アンケート提出枚数	348	100
Q1	もし留学するとしたら何がしたい？（複数回答可）		
①	語学力を向上させたい	303	87.1
②	外国人と友達になりたい	250	71.8
③	文化、スポーツ、歴史、自然等に触れたい	208	59.8
④	生活や勉強に関心	157	45.1
⑤	国際関係の学問、職業に関心	95	27.3
⑥	大学受験や就職に有利	60	17.2
⑦	新しいことに挑戦したい	128	36.8
⑧	進路考えるきっかけにしたい	55	15.8
⑨	その他	6	1.7
Q2	いつか留学したい？		
①	留学したい	250	71.8
②	留学したいと思わない	96	27.6
Q3	留学したくない理由は？（複数回答可）		
①	経済的に厳しいから	22	6.3
②	言葉の壁があるから	36	10.3
③	相談できる人がおらず留学関連情報が少ないから	4	1.1
④	留学方法、外国での生活等に不安があるから	36	10.3
⑤	帰国後の学校生活、進路に不安があるから	15	4.3
⑥	親元を離れたくないから	6	1.7
⑦	特に魅力を感じないから	36	10.3
⑧	その他	15	4.3

◆自分のリーダーとしてのあり方をもう一度考えさせられました。

何かを決めるとき、例えばチームで集まる時間を決めるときに、私はチームメンバーに何時くらいが良いか聞こうとしました。しかしメンバーは、「リーダーだからあなたが決めて」という風に言ってくれました。

人の意見を聞こうとする姿勢を持つ、といえば聞こえがいいですが、それはつまり決断力を欠いているというようにも考えられます。チームメンバーからはリーダーの決めたことに従うという信頼を感じることもでき、自信をもって決定する力をつけたいと思いました。

もちろん人の話を全く聞かずに一人で突っ走ることは良くないですが、柔軟さと決断力、この両方がリーダーには求められるのだと思います。（三年　萬木春菜）

◆ベトナムの問題解決策を考えるに当たって一番大事なことは、ベトナム人の「生」の声を聞くことだと心から思いました。この「生」の声は提案を考える上で大切な一つの鍵となり、その鍵がプレゼンテーション優勝へ導いてくれたのだと確信しています。

ある一国の問題を解決するには、他国の価値観を押し付けるのではなく、その国の文化、慣習、思想、普段の生活、政治事情などを理解してから解決策を提案すべきであり、また、それらを理解するためにその国について一番良く知っている現地の人と交流をすることが何よりも大切なことだと学ぶことができました。

この経験を生かして、世界で活躍できる、そして身の回りで起こる問題を解決できる人間になりたいと思います。（二年　森川千晴）

◆ベトナム・インドネシアからの参加者は日本人より英語がうまい、と何度も聞いていた。しかし、現地に行くまではそのことをほとんど意識していなかった。

彼らが英語をまるで母語のように自由に使っていることを尊敬するとともに、日常会話もままならない自分が恥ずかしくなった。その国の一般的な教育水準からだけで、各学生の能力の高さを決めつけることはできないと学んだ。

一方で、文法的に誤っていても身振りを加えたり、紙に書いたりして、相手とコミュニケーションをとることができるとわかり、英語を話すことへの恐怖をかなり払拭することができたと思う。

チームメイトたちは、とにかく真剣に私の英語を理解しようとしてくれて、それが何よりも嬉しかった。プレゼンでは私を気遣い、発表しやすいパートを割り振ってくれたことには、本当に感謝している。（二年　鈴木晴媛）